

NGO インターン・プログラム 完了報告書

団体名	特定非営利活動法人 テラ・ルネッサンス
育成期間	令和7年6月1日～令和8年3月31日
氏名	佐藤 翔

1) インターン期間を通じて得たもの

本プログラムを通じ、「可哀想だから支援する」という固定観念が覆り、対象者が直面する困難や人間の強さに敬意を払い、彼ら本来の力を引き出すための環境を提供するという真の支援のあり方を肌で学ぶことができました。

ウガンダでの海外研修では、スタディツアーの通訳や元子ども兵へのインタビューを経験し、彼らが語る「家族や子どものための夢」に触れました。この現場で得た一次情報と熱量を胸に、帰国後は支援者と現場を繋ぐ「翻訳者」としての役割に注力しました。結果として、22 件のイベント企画・運営（累計 981 名動員）や、延べ 701 名から約 3,573 万円のご支援をいただいた冬季募金キャンペーンの推進など、実践的なファンドレイジングのスキルと、多様なステークホルダーと共感で繋がるコミュニケーション能力を身につけることができました。さらに、他団体から様々なバックグラウンドを持つインターン生が参加をしていたことから、ファンドレイジングのノウハウや現場の状況について詳しく話を聞くことができ、今後長期的にも情報交換を続けられるつながりを得ることができました。

2) 今後の課題

ファンドレイジングの実践を通じて、目標金額や参加人数といった数字の追求と、一人ひとりの支援者と向き合い「共感の輪を拡大する」ことのバランスを取る難しさを痛感しました。

現地の複雑な課題や、遠い国の出来事をいかにして日本人々に「自分事としての物語」として伝えていくか。表面的な歴史や事実の羅列ではなく、個人のストーリーを深く掘り下げて届けるための表現力や企画力の探求は、今後も継続して取り組むべき課題だと感じています。

3) 今後の進路について

ウガンダでの海外研修や、日々のファンドレイジング実践を通じて学んだ最も大きなことは、「真の支援とは、彼らの本来の強さを取り戻すための環境を提供すること」という視点でした。

今後のキャリアにおいても、この視点を常に持ち続けたいと考えています。数字の奥にある一人ひとりの物語や、現場で生きる人々の「未来を想う力」を、共感とともに社

会へ伝えていくこと。それが私の使命だと感じています。本プログラムで得た「翻訳者」としての経験を糧に、今後も社会と現場を繋ぎ、平和や社会課題の解決に貢献できる人材として歩みを進めてまいります。

4) 団体コメント欄

インターン期間中、現場の熱量を「共感」という形に変え、多くの支援者へ届け支援につなげる重要な役割を担ってくれました。

当初持っていた支援への固定観念を、ウガンダでの実体験を経て「敬意に基づく伴走」へと昇華させた点は、大きな成長であったと感じています。ウガンダ帰国後の彼女の業務に対する姿勢や理解の深度は全く異なるものでした。特に冬季募金キャンペーンでは、単なる事務作業に留まらず、現場の「一次情報」を自身の言葉で紡ぎ直す「翻訳者」として邁進し、3,500万円を超える多大な成果に貢献してくれました。

「数字と共感の両立」という、プロでも悩む深い課題に自ら辿り着いたことは、彼女が誠実に業務と向き合った証です。この葛藤を忘れず、今後も共感の輪を広げ、平和を願い、行動する人を増やす活動に貢献することを期待しています。